

波郷記念館 だより第三十八号



江東区砂町文化センター
〒136-0073
東京都江東区北砂 5-1-7
電話：03(3640)1751

発行日
平成 29 年 12 月 20 日
発行元
江東区砂町文化センター

「波郷とあき子」
昭和 17 年軍人会館にて

開催報告

石田波郷記念館企画展「波郷あき子の相聞句」が十一月三十日をもって終了しました。

波郷とあき子の歩んだ道のりをパネルで紹介し、貴重な直筆資料のほか、波郷の胸部レントゲン写真なども公開、多くの方にご来場いただきました。

また、企画展期間中には関連イベントとして初心者向けの俳句実作講座

座「はじめてのHAIKU・句会体験」と英語通訳有の展示解説も開催し、多くの方にご参加いただきました。



▲展示の様子



▲大山恭子氏

俳句実作教室講師には、大山恭子氏（清瀬市石田波郷俳句大会実行委員副会長）にお越しいただきました。

初めて俳句を作る！という方からも積極的に質問が上がり、講座内は大盛り上がり。最後には簡単な句会をおこない、講座は終了しました。



▶句会の様子

企画展関連イベント① 「はじめてのHAIKU・句会体験」 投句一覧

古傷や触れてはならぬ芙蓉の実
木枯や錦衣を脱がせたり
降りやみて落葉の色香あざやかに
コスモスや給湯温度一度上げ
花売りの白き息してピラカンサ
秋入るや雁はやばやと里の空
緋衣もあせるどうだん紅葉かな
堅川やカヌーを伏せし冬のをり
われ先に葉を落としたる冬木立
七十九を余生とはせじ波郷の忌
うつすらと有明の月居残り
菊香る夕べの闇に明日を見る
かさね着て句会に向う波郷の忌
言の葉を指折り数え柿落葉
師の声の明るき色や冬ぬくし

企画展関連イベント② 企画展英語解説



▲根岸正氏

「はじめてのHAIKU・句会体験」と同時に開催された企画展の英語解説。通訳案内士の根岸正氏をお呼びし、約十五分間の解説を二回にわたっておこないました。

英語での展示解説は石田波郷記念館としては初めての試み。残念ながら海外の方の参加はありませんでしたが、英語を勉強している、あるいは、どのように英語の訳をするのか興味がある、という方にご参加いただき、途中で文法や言葉の意味の質問があったりと、展示物の説明だけにはとどまらない、講師、参加者ともに交流が深まったイベントとなりました。



▲解説の様子



こども俳句ワークショップ 〜江戸の町並で 季節を感じよう！〜

深川江戸資料館常設展示室を解説つきで見学し、その後俳句を作ります。江戸時代にタイムスリップし、いろいろな昔の道具を見て触って感じて、楽しみ、感想を俳句に詠んでみましょう！



- 日 時 平成30年2月17日(土)
PM1時～PM5時
- 場 所 深川江戸資料館ほか
- 対 象 小学3年生以上 親子15組
- 参加費 ￥500円(親子1組)
- 講 師 大谷弘至(俳句結社「古志」主宰)
- 申込み 1月10日(水)AM9時～電話・窓口で(先着順)
⇒砂町文化センター(〒136-0073北砂5-1-7)
- 電 話 03(3640)1751



深川江戸資料館常設展示の様子



企画展「波郷 あき子の相聞句」

英語解説書 PART①

[英訳：根岸正(通訳案内士)]

企画展内で配布した企画展解説書の一部です。

Foreword

Ishida Hakyō committed his life to haiku, or seventeen-syllable (Japanese) poems and continued to take the initiative in haiku circles after the Second World War. His achievement was supported by the dedication of his wife, Akiko.

Akiko began to compose haiku around from 1959 under the influence of his husband, a haikuist, and left many excellent works. Her works unintentionally included haiku composed in reply to ones by Hakyō and conversational haiku between them. Some of them emphasize strong bonds of their marriage.

This exhibition includes "Somon-ku", romantic exchanges of haiku between Hakyō and Akiko, photos, panels and materials of their own handwritings. Through this planned exhibition, we'd like to think back to the way they followed.

【日本語訳】

— 「はじめに」

17字の俳句に人生を賭け、戦後の俳壇を先導し続けた石田波郷。その功績の裏側には妻のあき子の献身的な支えがありました。俳人である夫の影響で、あき子自身も1959年ごろから俳句を作り始め多くの素晴らしい作品を残しています。その中には囚らずも、波郷が詠んだ句に対する返信、あるいは、会話をしているかのようなものがいくつもあり、夫婦の絆の強さが伝わってきます。今回の企画展では、波郷とあき子の相聞句のほか、写真やパネル、直筆資料とともにふたりの歩んできた道のりを振り返ります。

— Exhibition 1 : Hakyō & Akiko: an encounter ~ marriage

Hakyō and Akiko met each other in 1942 through the introduction by NAKAMURA Kinrei, a haikuist, living in Edogawa-city.

In June, 1942, they had a wedding on the Gunjin Kaikan (present Kudan Kaikan), and then they went on their honeymoon to Ikaho hot springs. At that time, Hakyō had only a new hand towel and a collection of poems "Dotei (Journey)" by TAKAMURA Kotaro. She recalled later, saying; "Upon seeing his belongings, I thought he should be a real poet."

【日本語訳】

— 展示コーナー1「波郷とあき子、出会い～結婚」

波郷とあき子が出会ったのは1942年のこと、江戸川区に住む俳人、中村金鈴の紹介によるものでした。同年6月、九段下にある軍人会館(現・九段会館)で式を挙げた後、ふたりは伊香保に新婚旅行へ行きます。その時に波郷が持っていた荷物は、新しくてぬぐい一筋と、高村光太郎の詩集『道程』のふたつきり。それを見てあき子は「彼こそ本物の詩人だと思った」と後に回想しています。

— Exhibition 2 : the Second World War ~ life in Suna-machi

In 1943, Hakyō and Akiko had the long-awaited first child, the eldest son "Nobuo". It was, however, a transient joy, and a draft notice was delivered to him. Hakyō, with initial symptoms of tuberculosis in those days, was assigned to the front, and therefore, his worsening condition depressed him so much that he only waited for death.

Hakyō miraculously escaped death, but he was not strong enough to stand a soldier. Shortly after that, he was discharged from the military service and taken back to Tokyo. Akiko visited Hakyō with their son, and finally the parent and child did meet again.

In 1945, when the war ended, Hakyō's family was in Saitama, their place of refuge. One year later, they returned to Suna-machi again, and started their new life.

【日本語訳】

— 展示コーナー2「戦争～砂町暮らし」

1943年、波郷夫婦の間に待望の第一子、長男・修大(のぶお)が誕生します。しかし、喜びもつかの間、波郷のもとに召集令状が届きます。この頃から結核の陰があった波郷は赴いた戦地にて体調を大きく崩し、一時は死を覚悟するほどまでに落ち込みます。奇跡的に命を取り留めた波郷でしたが、もはや兵士として使える身体ではなく、やがて召集解除となり東京へ搬送されます。あき子は息子を連れて波郷のもとへ訪れ、ついに家族は再会を果たしました。

1945年、疎開先の埼玉で終戦を迎えた波郷一家は、その一年後に焦土となった砂町に戻り、新たな生活をスタートさせていきます。

英語展示解説書の後半は、3月20日発行の「石田波郷記念館だより」にてご紹介いたします!

砂町文化センターニュース

Vol.
38

これから開催、ホールイベントのご案内

2/11 砂町文化センター成果発表会 (日・祝)

砂町文化センター主催講座、自主グループ、利用サークルの皆さんが一年間の学習成果を披露します。音楽演奏やバレエ、ダンスなど、様々なグループが出演します。入場無料です。

【開演】 12時 【会場】 砂町文化センター3階 研修室

【出演団体】(出演予定順)

- ①こどもバレエ教室
- ②トモ・ダンスサークル(社交ダンス)
- ③口笛サークル 砂町バンビ
- ④クラブドルフィンズ(キッズダンス)
- ⑤プアナニ高橋 ハワイアンフラ砂町・東大島
- ⑥合唱団「砂」 ⑦明星(大正琴)
- ⑧ヤング★ハワイアン
- ⑨ケーナワイラデ砂町(ケーナ)
- ⑩砂町民謡同好会
- ⑪ソウル&ディスコダンシング



ケーナワイラデ砂町

2/14 砂町文化亭 柳家小三治・柳家小里ん二人会 (水)

開演：19時(開場18時30分)

会場：砂町文化センター3階 研修室

料金：全席指定	一般	3,800円
	受講生	3,600円
	ティアラ友の会	3,500円
	シニア(60歳以上)	3,500円



柳家小三治

柳家小里ん

満席が予想されるため、ご希望される方はお早めにチケットをお買い求めください。

砂町文化センター駐車場及び通称「バナナ公園」側の入口の正面に「野田琺瑯株式会社」があります。ご存知の方も多いと思いますが、この10数年、ポットや保存容器等で、琺瑯（ほうろう）の商品が定着し、おしゃれなインテリアとしても人気が高く、百貨店やセレクトショップで見たことがある方も多いかと思います。今回は、野田琺瑯さんにお話を伺いました。

【ほうろうってなあに？】

琺瑯は、強いけれど錆びやすい鉄と、壊れやすいガラス質からできている製品です。製造工程は、鋼板から型を作り、その上にガラス釉薬を施し、焼き上げて、再度釉薬を浸して再度約 850 度で焼き上げます。また、琺瑯は、熱伝導もよく、火にかけてよし、保存容器としてもよし、食品に向いています。最近では、ぬか床として人気があるとのこと。



火にかけても、冷蔵庫で保存もできる

【野田琺瑯の歴史は？】

1934年（昭和9年）に創業されましたが、太平洋戦争で、閉鎖。1947年（昭和22年）野田琺瑯株式会社として、創業を開始。1994年（平成6年）に北砂にあった東京本社工場を閉鎖し、製造部門を栃木工場に集約する。2003年に「ホワイトシリーズ」を発売。料理研究家やスタイリストの愛用品として著書や雑誌に取り上げられ、シンプルで応用範囲が広い道具として関心が高まり、現在に至ります。新しい商品開発はもちろんのことですが、創業当時のホーロータンクという名の青色の保存容器は、現在も作られています、焼き鳥屋さんや、うなぎ屋さんのたれの容器をみてください。きっと見つかります。琺瑯作りで、最初の鋼板の型作りから、最後の焼入れまで、一貫して作る日本唯一のメーカーであり、ひとつひとつ手作業のため、大量生産ができなく、商品に関して、こだわりをもっています。

現在よりもっと職人が多かった昭和初期に創業された野田琺瑯。今もなお、昭和の江東区の職人気質が商品に受け継がれています。



創業当時のホーロータンク

【どこで売っているの？】

野田琺瑯の商品は、会社で販売をしていません。百貨店で、取り扱っています。

野田琺瑯株式会社

江東区北砂 3-22-22 URL <http://www.nodahoro.com>